



## 巻 頭 言

### 研究と対話：討論

末 松 安 晴\*

ソクラテスは対話を教育に導入し、それより前には、わがお釈迦さまは、ご自分が達せられた悟りの境地の一断面ずつを種々の角度からもっぱら対話により人々に伝えられたと記録されている。古来、至高の境地は対話でのみ交換されている。一方、相対性理論はアインシュタインと協力者達との間の度重なる不断の討論を経て産み出されたといわれる。新しいものを産み出すには、この種の討論を経ることが多い。学会発表でも討論の時間がますます重要視されてきている。昔は宗教、いまは研究、いずれも肉体作業も入るが、精神活動が主体である。

小賢しい言い方をすれば、人間の頭脳に蓄えられ、その中で高度に営まれ、生産されている膨大な情報量を、整理して一方的に相手に伝えうるほどに言語は発達していない。したがって、刻々に変化する状況に応じて適当な表現を選択でき、相手の反応に応じて修正できる対話という方法が、不完全ながらも最も効果的な情報交換の手段となっているのであろう。

一方、刻々にそしてやや漠然と、変化する頭脳内部の情報も当然ながら言語意識としては十分に整理されているとはいいがたい。対話を経て効果的に言語情報の形に再整理されるのではなかろうか。

このような不完全な言語を媒介にして交換する手段しか持ち合わせていないわれわれ人類には、意識の伝達・整理・啓発・創造を行なうには、対話や討論を通じて行なうのが最も効果的な方法として、古代から今日に至るまで継承され続けてきたのであろう。

一面、近代の科学技術に対話のみに頼るには複雑すぎることも事実である。これに対して、設定された特定の条件の範囲内に限られはするが、数式を駆使する理論は多くの場合、言語では困難な高度の論理性をもって進められ、思考・討論時間をある程度は短絡させてくれる。しかし、それ以上の何物でもない。

研究を進めるには、1)人類社会が指向する方向を過去の歴史から推測することと、そのための幾らかの、2)非論理的な直感、そして、3)持続するための体力が必要であろう。これらを元にして研究を推し進める過程が、4)対話：討論ではなかろうか。対話や討論は、互いに理解が不鮮明な部分や、気がつかなかった盲点、あるいは、臆気な予見を鮮明にし、深めてくれる。陳腐ではあろうが、時間を掛けた不断の討論のみがこれらの高まりを効果的に引き出してくれるといわれている。このことは容易に見えても、いざ実践する立場になるとそれほど簡単に実行できるものではないようにも思われる。